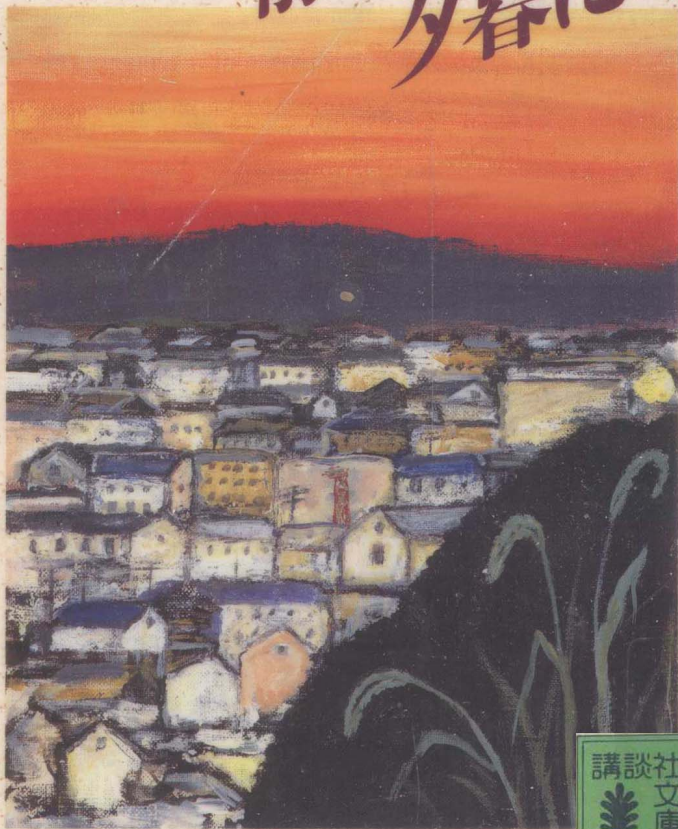


赤川次郎

静かな町の
夕暮に



講談社
文庫

しず まち ゆうぐれ
静かな町の夕暮に

あかがわ じろう
赤川次郎

© Jiro Akagawa 1991

1991年8月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。

(庫)

ISBN4-06-184955-7



講談社文庫

静かな町の夕暮に

____ 赤川次郎

目次

8	7	6	5	4	3	2	1	プロローグ
秘密の恋人	少年	真夜中の影	殺人	母の笑い	突然の旅	送別	ビッグニュース	

122	107	92	76	60	45	31	11	5
-----	-----	----	----	----	----	----	----	---

9	すれ違う視線
10	疑惑
11	長い夜
12	第二の死
13	夜の人影
14	真夜中の仕事
15	空白の一行
16	喉の刃
	エピソード
	解説

山
前
讓

295	288	270	251	234	214	193	177	156	137
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

プロローグ

やっと、待っていた黄昏^{たそがれ}がやって来た。

風が冷たくなり、頬^{ほお}を刺す。——もつとも、私の頬は熱く燃えるようだったから、その冷たい風も、快適ですらあったのだけれど。

「寒くなったね」

と、彼は言った。「戻りたくないかい？」

「どっちでもいいわ」

と、私は肩をすくめた。「帰る？」

「暗くなるしね。——戻ろう」

と、彼が促す。

「うん」

肯いて、私はそれでもしばらくはその場を動かなかった。

彼は私をせっつきたくはないようだった。男の方が、寒がつて早く帰りたがるというのは見つともない、という気持もあったのだろう。

私は、もう少し時間を稼いでおきたかった。確実に、辺りが薄暗くなるまで。

「――陽が沈む時にね」

と、私は言った。「あの山の天辺のところが赤くなるの。きれいなよ」

「そうか」

彼が両手をポケットに突っ込んで、首をすばめ、それでも精一杯見栄を張っているのを見て、私は笑いをかみ殺した。男なんて、本当に見栄っ張りなんだから！

寒いといえ、それも当然といえた。十一月に入って、もう目の前の山も頭の方に、うっすらと雪が粉砂糖をまぶしたようにかかっていたのだから。

山間に陽が落ちると、たちまち辺りは暗くなって来る。――山の斜面は、私の注文通りほんの一瞬、赤く染った。

「行きましょうか」

私が言うのと、彼はホツとしたように、

「うん。――まあ、そう急ぐこともないけどね。風邪でもひかせたら申し訳ないし」と、それでもまだ強がっている。

私たちは、町へと下って行く道を、ゆっくりと辿って行った。

もう町には灯が入って、光で編んだレース編、といった様子で広がっている。小さな町だ。

いつか、この町を出て、大きな都会で働くこと。それが一七歳になる今日までの、私の長い長い夢だった。今、私は自分の手で、その夢を、シャボン玉のように叩き潰そうとしている……。

「今日は無口だね」

と、彼が言ったので、私は少しドキツとした。

いつもと変らないように振舞っているつもりなのだが、はた目には、そう見えないのかしら？でも、大丈夫。——疑われてはいないはずだ。

私は、薄いハーフコートを着ていた。大きなポケットがついていて、そこに手を入れて歩いている。

道は、なだらかな草地の中をしばらく右左へ蛇行^{だこう}して、それから少し急な坂道になって、林の中を抜ける。今、もうそこには黒々とした「夜」が一足先にやって来ていた。

「無口かなあ」

と、私は言った。「私、いつもそんなにおしゃべり？」

「いや、そんなことはないけどね。少し元気がないように見える」

「だって……。色々いやなこともあったし……」

「ああ、そうだね」

彼は肯いた。「しかし、もうすっかり済んだんだ。すぐに忘れるわけにはいかないだろうが、後は時が解決してくれるさ」

「そうかしら」

まだ。——まだだ。まだ何も解決されてはいない。

事件は終わっていない。

そう。まだだね。まだこゝでは早い。もう少し、あの林の奥へ入ってからでなくては。彼が私の肩に腕を回した。――予期していたことだから、驚きはしなかった。もし、ハッとしたり、たぶん氣付かれただろう。

「そうかしら、って、どういう意味だい？」

と、彼は訊いて来た。

道は、急に暗くなつた。林の中へ入つたのだ。

「意味って？」

と、私は訊き返した。「忘れることなんかあるのかな、と思つただけよ」

「そうか。いや――君が、まだ事件が終つていない、と思つてゐるのかな、とね……。まあ、すつきりしないところはあるけれど」

「でも、もう何も起らないわ。そうでしょう？」

ポケットの中で、私の手はナイフを握りしめていた。

道は、ほとんど夜の中へ溶け込んでしまつていた。ただ、木立ちの間に揺れる町の灯で、正しい方向へ歩いていることが分るだけだ。

風が、少し強く吹きおろして来て、梢を鳴らした。

「そうとも」

彼の、私の肩を抱く手に、少し力が入つたのは、風の冷たさのせいだったろうか？

「もう、何も起りっこないさ」

今日を最後にね。——私は心の中で呟いた。

ナイフを握った手。後は、ただ手をポケットから出して、ナイフを突き立てればいい。さあ！
今——。

「今日が——」

と、彼が言いかけた時だった。

ガタガタツ、と音がした。二人の背後からだった。

木の枝や草の音でなく、金属の触れ合う音だ。同時に、黄色く弱々しい光が、私たちの影を道の上にのばした。

「やあ、誰かと思った」

聞き慣れた声に振り向くと、古ぼけた自転車に乗った、駐在所のお巡りさんが、ブレーキをキイキイきしませながら、私たちに追いついて来たのだ。

「この寒いのに散歩ですか」

「まだ若いんだもの、私」

と、私は言った。

機会を失ったことを悟った。もう少し行けば、道は林を出て、そこからは人家が並んでいる。その先は小さな川。

私が子供のころには、川から外側には家はなかったのだけれど。

「あんまり遅くなると危いよ」

と、お巡りさんは言った。「川に落ちたら、大変だ」

その言い方に、私は笑い出していた。

もう、二度と笑うことがあるとは、思ってもいなかったのだけれど……。

私の笑い声は、あの夏の暑い日に、友だちと一緒に笑って笑い合った、あの時と同じ声だったろうか？

たった数カ月前の、でも、今となってはあまりにも遠い昔のような、夏――。

I ビッグニュース

キラリ、と太陽の光が、その二人の男を捉えた。

「来るな！ 近付くな！」

かれて、かすれた声で叫んでいるのは、無精ひげに汚れた顔の、作業服姿の男だった。汗が、シャツから作業服にまで、にじみ出て黒くしみを作っている。

「近付くと殺すぞ！」

その男は、ナイフを振り回していた。届く範囲に人はいない。でも、まるでその男の目にだけは、無数の敵が見えているかのようだった。

その男を、十人近い警官が、遠巻きにして取り囲んでいる。もちろん、みんな汗で顔が光っていた。

「ナイフを捨てろ！」

と、一人が怒鳴った。「もう逃げられないぞ！」

「死んでやる！ 死んでやるとも！」

と、その男が叫んだ。「だけど——一人じゃ死なねえぞ！ 道連れにしてやる！ 誰でもいい。

かかって来い！」

警官たちが、ひるんだ。

私は——その光景を、二人の友だちと一緒に、くさむらの中に座り込んで、見ていた。女学生三人、身を寄せ合って、突然目の前で展開している場面に、怯おそえているところだ。

「意気地なしめ！」

と、男がヒステリックな笑い声を上げた。「誰もかかって来ねえのか！——臆病者！ 弱虫め！」

背後から忍び寄ろうとした警官は、パツと振り向いた男のナイフで、危うく切りつけられそうになって尻もちをついた。

「——撃つぞ！」

拳銃を抜いて構えながら、一人の警官が怒鳴る。「ナイフを捨てて、手を上げろ！」

「撃つてみやがれ！ 一人や二人は、撃たれたって刺せるぞ！」

今や、追われる者の方が強気だった。男が前に進み出ると、警官は後ずさりする。真夏の太陽が、刻々と肌を焼くように照りつけていた。

「本当に撃つぞ！」

「撃て！——さあ、とつととかたをつけようぜ！ 俺と心中しようじゃねえか！」

男がナイフを振りかざす。私は、思わず叫び出しそうになって、口を手で押えた。

と——暑さに揺ゆらぐ大気を貫つらぬいて、銃声がした。

男が、腹を押え、びっくりしたように目を見開く。その目が見ているのは、警官ではなかった。

女が一人——猟銃を手に、立っていたのだ。銃口から、うつすらと煙がゆらぎながら立ち上っていた。

男がガクツと膝をつく、手からナイフがすっぽ抜けて落ちた。そしてくさむらの中へ突っ伏すように倒れる。

——誰もが、息さえ殺しているような沈黙……。

不意に、女が泣き出した。銃は足下に落ち、まるで祈るような格好で膝をついて、そのまま背中を丸めて、泣き伏す。

警官たちが、息を吐き出し、帽子を取って、汗を拭った。しかし、次々に流れ落ちて来る汗は、拭ってもきりがなかった。

私も、汗が目に入りそう、拭いたかったのだけれど、動いていいものかどうか、迷っていた。——早く、早く、終ってほしい……。

「カット！」

と、声が飛んだ。「OK！ 良かった」

まるで魔法のおまじないのように、死んでいた男が立ち上り、泣き伏した女がパッと顔を上げる。

「——暑い！」

と、その女優がまず叫ぶように言った。

「お疲れさん」

見えない縄が解けたように、一斉に人々が動き出す。

「——もういいんだって」

私は、両側からギュッと挟まれて、暑くて仕方なかったのだ。「ほら、立とうよ」

「だって……足がしびれて……」

「そう。私も」

「何よ、だらしない！」

私は笑って、「ほんの五、六分、しゃがんでただけじゃないの」と、立とうとした。

「キャッ！」

足に力が入らない。妙な姿勢で座っていたので、やっぱり気が付かない内にしびれていたのだ。そのまま、私はひっくり返ってしまった。

「見ろ！ 人のこと笑うから！」

「そうだ！ やっちゃえ！」

二人が私の足をくすぐるので、私は転るように逃げ回って、キャーキャー声を上げた。

三人でもつれるように転って、大笑いしながら、起き上ると――。

ロケ隊の人たちが、みんなニヤニヤしながら、私たちの方を眺めていたのだ。

「いや、いい眺めだった！」

と、監督さんが言った。「カメラを回すべきだったな」

「いやだ！」

私たちは、あわてて立ち上った。転りながら、大分派手にスカートがまくれ上ったに違いない。

「ひどい！」

と、監督をにらむと、

「いや、若々しくていいよ」

と、初老の、ユーモラスな監督は笑って言った。「君ら、とても良かったよ。いや、誰かがカメラの方をチラッと見るんじゃないかと心配してたんだ。後でフィルムを映してみても分るとがっかりだからね。気を付けて見ていたが、大丈夫だった」

「ちゃんとうつつてます？」

と、厚子^{あつこ}が訊いた。

「ああ、うつつてるとも。そうだ、君ね——」

私の方を向いて言われたので、ドキツとした。

「私ですか？」

「うん。声を上げそう、って感じで、口を押えたらう。自然で良かった」

「ワッ！ 目立とうなんて！」